

## 「渾沌」変容考

## 一 『莊子』の「渾沌寓話」から

現在、「渾沌（混沌）」は「無秩序」を意味し、日常的に広く使われている語句の一つです。「渾沌」は定形を持たないものと捉えられますが、漢籍では次のようないくつかのイメージで登場しています。

- (一) 「渾沌未分（カオス）像」(『三五歴史』・『淮南子』・『論衡』)
- (二) 「凶悪神格（デーモン）像」(『書経』・『史記』・『神異経』)
- (三) 「餛飩点心（ワンタン）像」(『資暇集』・『北戸録』・『春秋演繁露』)
- (四) 「天真無垢（イノセンス）像」(『莊子』)

以上のうち、ここでは定番教材である『莊子』「応帝王編」の「渾沌寓話」（「天真無垢像」）を取りあげて考察していきます。

南海之帝ヲ為シ儵ト、北海之帝ヲ為シ忽ト、中央之帝ヲ為スニ渾沌ト。儵ト与レ忽ト、時ニ相与ニ遇フニ於渾沌之地ニ。渾沌待スルコトレ之ヲ甚善シ。儵ト与レ忽謀リテ報インコトヲ。渾沌之徳ニ曰ク「人皆有リニ七竅、以テ視聴食息ス。此レ独リ無シレ有ルコト。嘗試ニ鑿タントレ之ヲ。」日ニ鑿テニ一竅ヲ、七日ニシテ而渾沌死ス。

南海の帝「儻」と北海の帝「忽」が中央の帝「渾沌」の地で面会した際に、儻と忽は渾沌への謝礼のために「人には皆七つの穴があり、それによって生活が可能なのに渾沌には穴がない。試しに一つ穴を開けてやろうではないか」と相談し、一日に一つずつの穴を開けているうちに渾沌が死んでしまいます。「儻」、「忽」ともに「たちまち」の意となるのに対し、「渾沌」は「万物が未だ形成されておらず、陰陽の気がまだ分かれていない状態」を表します。つまり、自然状態のものに無理に人知が入り込んで文明化させる問題が主題となります。一般に人は目、耳、鼻、舌などの五官により外界の刺激を吸収するものですが、こうした刺激は人の本性を疲れさせるものにもなりかねません。結果的には情報過多により個人の本質を損なうと解されてきました。

莊子は「知」のあり方そのものに疑問を投げかけています。「知は待つ所有りて然る後に当たる」(「太宗師編」)、「知なるものは争の器なり」(「人間世編」)、「聖人は謀らず。悪くんぞ知を用いんや」(「徳充符編」)など、知の限界が繰り返し語られています。「莊子」「天地編」では老莊思想を指して「渾沌氏の術」とも称されるため、「渾沌」が当該思想の中でも中核をなしていたことがうかがい知れます。

老莊思想が最も流行したのは晋代に入ってからと言われます。「竹林の七賢」にも数えられる阮籍が『達莊論』を著して「無為の貴」を説いたことが『晋書』巻四十九に見えますし、陶淵明の「飲酒」や劉伶の「酒徳頌」も『莊子』の影響が色濃いことがこれまで指摘されてきました。

## 二 和書における「渾沌寓話」の受容

『莊子』はその書物伝来とともに西晋の郭象による『郭註莊子』が広く読まれてきました。室町時代の五山僧の間では宋代の林希逸『莊子虞齋口義』が好まれますが、江戸中期の儒者荻生徂徠は林注を批判して郭注を見直し

ました。「渾沌寓話」における「天真無垢（イノセンス）像」は概して儒家にも肯定的に受け入れられた様子が見受けられます。近世儒家の祖にして林羅山の師に当たたる藤原惺窩は、豊臣秀吉の御側衆大村由己（梅庵）とのやり取りの中で、漢詩文において「混沌説」を説きながらその自然性を強調しています（以下、訓点は筆者による）。

蒙莊之言ニ云ク、「日ニ鑿チ一竅ヲ一七日ニシテ混沌死スト。」於イテモ詩ニ亦タ如キレ耶。意也体也、于イテ首尾ニ一于イテ胸腰ニ一斧ニ鑿シテ之ニ一不ル至ニ死句ニ者ハ未ダ有ラレ之。活句乎、活句乎。養フ混沌之徳ヲ一者ハ非ズシテレ翁ニ而又誰ニチラン歟。

（『惺窩先生文集』巻三「次韻梅庵由己并序」）

世間が詩文に技巧を凝らすあまり死句を生み出してしまふ風潮を批判的に捉えながら梅庵の活句を讃えた点に注目できます。こうした自然性を重視する姿勢はその後も対象を変えながら継承されました。近江聖人と称せられ陽明学を信奉した中江藤樹は「一向に世人の譽をもとめて、徳性の養をたちすて、混沌の死する事をしらすること恰も楚女の寵愛をもとめて餓死したるに似たる故に、寓言の故事をかりて喩たり」（『翁問答』下巻末）と説き、君主の寵愛を受けるために体型を気にしたあまり餓死に至った「楚女細腰」の故事を踏まえて、人々が流行を模倣して名利に走り、徳性を失っている現状に当てはめています。鬼神なる不可思議なものの存在について語らなかつた孔子ですが、近江の儒者で早くに没した富永滄浪は「鬼神有無之論所由起也。弁論之甚至王充阮瞻之徒、渾沌全死（鬼神有無の論由りて起る所なり。弁論の甚しきは王充阮瞻の徒に至りて渾沌全て死す）」（『古学弁疑』）と述べ、後漢の王充や西晋の阮瞻の無鬼論により聖人の教えに疑念が持たれたことを「渾沌全て死す」と表現しました。また、門弟四千人を数えた広瀬淡窓の咸宜園を嗣いだ弟の旭窓は和漢の儒者觀を次のように述べています。

畢竟ハ宋以後ノ学者、権ト云フ義ヲ失フテ、学悉ク死物トナルヨリシテ、朝廷ノ人、名ヲ争フ而已ニナレリ。我邦、忌御免ハ、免セラル者、難有ト云ハサルヲ、礼トスル位ニテ、他人ヨリ一言是ヲ攻ルモノナシ。此風大ニ漢

一 土三勝レリ。我唯、今後拘儒ノ混沌ヲ鑿タンコトヲ恐ル。

(二)九柱草堂隨筆』卷二

宋代以降、中国では儒学が教義主義に陥つたの対し、わが国では本来特例であるはずの喪中出仕(忌御免)にも批判を受けることがないという「混沌」的で純朴な国民性を讃えています。幕末期に水戸の藩校彰考館初代総教に就任した青山延于は『文苑遺談』において宝暦年間(一七五二―一七六四)に水戸藩に将来した古文辞学派の学者田中江南と結びつけています。この人物の登場によって固陋の旧弊に陥っていた藩内の宋学が一変したのですが、その後には古学が隆盛を極めた次第を語る中で「明儒の儉薄(薄情)」の風が人々に染みついた点に言及しつつ、「至今不可去者亦江南之余毒也。此豈所謂七竅成而混沌死者耶(今に至りて去るべからざる者も亦た江南之余毒なり。此れ豈に所謂七竅成りて混沌死する者ならんや)」と述べ、純朴な人柄の変化を嘆きました。老荘思想に由来する「混沌」ですが、上記の用例からはその天然性については江戸時代の多くの儒者が好意的に受容しているようです。

古辞書類には『日葡辞書』Conton. 例 Conton mibun (混沌未分)、『易林本節用集』(慶長二年(一五九七)頃)「**☰**混沌ノ**☱**混乱一沌」、『合類節用集』(延宝八年(一六八〇))卷三人物部「**☰**渾敦 万人ヲ云、人支部**☱**混沌衣 人胞ヲ云、卷五禽鳥部**☱**渾沌池、卷八言語部**☰**渾沌、**☱**書言字考節用集』(享保二年(一七二七))卷一乾坤**☱**混沌**☱**書言故事陰陽未分**☱**事苑清濁未分——為一也」などあり、その形態にも触れています。

### 三 戯画化された「混沌」像

近世俳諧の分野において「混沌」はまたもう一つの顔を覗かせました。俳諧における『莊子』の「寓言説」は貞門派、談林派ともに林希逸注に拠るところですが、近世初頭から俳言を強く提唱した松永貞徳門下の貞門俳諧に対して、洒脱の気味が強い西山宗因門下の談林俳諧がこれに対抗しました。この火種がやがて両派の争いへと発展

していきます。延宝二年（一六七四）に刊行された談林派宗匠宗因の『蚊柱百句』に対し、南都の去法師なる人物が『洪団』において『蚊柱百句』を批判しました。これを受けて、宗因の弟子岡西惟中は翌三年（一六七五）に『俳諧蒙求』を刊行して貞門派の軽口俳諧に批判を加えますが、ここには俳諧の心得が記されています。

一、俳諧の二字 第一この二字のころをよく会得せざれば、俳諧にはならぬ事なり。

一、俳諧といふころもろこしの書には『史記』『莊子』のころなり。

一、『莊子』 一部の本意、これ俳諧にあらずといふ事なし。「逍遙遊の篇、林希逸か注に、「不知是滑稽ノ処如今ノ人ノ所謂断頭ノ話也」とあり。またその下の注に「読ニ莊子ヲ其実皆寓言也」ともみえたり。

松尾芭蕉もまた『笈の小文』（宝永四年（一七〇七））の中で「百骸九竅」（『莊子』齊物論編）の語句を用いて自らの境遇を振り返ります。冒頭の「百骸九竅の中に物有。かりに名付て風羅坊といふ」の一節はとも有名です。さらに弟子の其角、才丸、揚水の四人で詠み交わした『俳諧次韻』（延宝九年（一六八一））には、当時の芭蕉（俳号は「桃青」）の『莊子』「駢拇編」に趣向を借りた発句に対して、宝井其角は次のような脇句を付けています。

鶯の足雉脛長く継添て  
桃青

這句以テ「莊子」可シ見ッ矣  
其角

発句は長足の鶯の余分を短足の雉に継ぎ足すことの無意味さを説きながら、それぞれの生物の特性を生かすように説いた句意ですが、脇句において其角は前句の典拠について漢文訓読体で注釈を試みています。さらに、この句集には芭蕉の次のような句を見ることができます。

渾沌翠に乗て氣に遊ぶ  
桃青

目鼻耳口の七竅を持たない「渾沌」を「ぬぺつぼう」とルビつきで詠み込み、顔のないものとしての形容として

用いています。現在一般的に「のつべらぼう」と称され、顔のない妖怪の代表として鳥山石燕『画图百鬼夜行』（安永四年（一七七五））などにも紹介されます。このほかに、蕉門の松倉嵐蘭は『桃青門弟俳諧独吟廿歌仙』（延宝八年（一六八〇））の中で次の句を詠み込みました。

目やら鼻やら只ぬらり殿

人並みにされども食は参りけり

やはり耳目のないぬらり殿（渾沌）であつてもちやつかり食事はかささない愛嬌ある様子がかがえます。同時期に芭蕉の高弟其角の編纂した『虚栗』（天和三年（一六八三））は蕉門以外に貞門派、談林派などの作品も入集しており、蕉風の確立に一役買った句集として名高いですが、巻下に「渾沌」を詠んだ次のような句も見えます。

不二に目鼻混沌の王死シテより 鼓角

渾沌の死により「不二（富士）」にまで目鼻をつけるといった、やはり「ぬべつぼう」的要素を強調する句風になっています。江戸中期の俳人横井也右の『鶉衣』後編にはこの「渾沌」が顔面ではなく腹部に見立てられる点に特色があります。

人の支体に不用を論せは、男の乳はかりこそいかなる益のあるとも見えねと、今更これらをとれり払へ、腹ハ渾沌王の面かげして、世にすげなきものなるへし。 （臍頌）

ここでは「臍不用」論から始まって男の乳頭もまた意味を持たないものとして取り去ったならば、腹は「渾沌王」の面影になって愛想のないものとなると解釈を加えています。明治二十九年（一八九六）一月、俳人正岡子規は雑誌『日本人』に次の文章を寄稿しています。

天地渾沌として未だ判れざる時腹中に物あり恍たり惚たり形海鼠の如し。海鼠手を生じ足を生じ両眼を微かに

開きたる時化して子規と為る。猶鷺なほのかひ子のうちにあり。余が初めて浮世うきよの正月に逢ひたるは慶応四年なれば明治の新時代は將に旧時代の胎内を出んとする時なりき。其時の余は余を知らず。況して四圍の光景は露知らざりしも思へばきはどき年を重ね初めたるものかな。  
〔新年二十九度〕

自らの出生を「混沌未分」の状況として、これが明治維新期に重なったことにある種の感慨を覚えているようです。彼の句に「混沌をかりに名づけて海鼠哉」があり、「海鼠」の姿に見立てました。

「渾沌」が持つユーモラスな側面はすでに唐宋時代の漢詩文の中にもしばしば詠み込まれました。中唐かんげうの韓愈かんげう「南帝初奮槌 鑿竅泄混沌（南帝初めて槌を奮ひ、竅を鑿ちて混沌を泄す）」（嘲鼯睡其二）と鼯声に合わせて詠み込んだり、北宋の蘇軾そしき「既鑿渾沌氏 遂遠華胥境（既に渾沌氏を鑿ち 遂に華胥の境に遠ざかる）」（飲酒第四）と飲酒する口になぞらえたり、同じく北宋の晁説之ちやうせつし「描難渾沌肩 遽識齊宿瘤（描き難し渾沌の肩 遽に識し齊宿の瘤）」（無己初除正字以詩寄之）とぬつべらした顔に肩を引いたりするなど様々な用例が散見できます。

ノーベル物理学賞を受賞した物理学者湯川秀樹ゆかわひできもまた『莊子』の愛読者として有名であり、素粒子の研究の際に「渾沌寓話」から示唆を得たことを述懐します。

儻も忽も素粒子みたいなものだと考えてみる。それらが、それぞれ勝手に走っているのでは何事もおこらないが、南と北からやってきて、渾沌の領土で一緒になった。素粒子の衝突がおこった。こう考えると、一種の二元論になってくるが、そうすると渾沌というのは素粒子を受け入れる時間・空間のようなものといえる。こういう解釈もできそうである。  
〔本の中の世界〕

漢籍における「渾沌」はわが国においても様々なものに読み換えられ、のっぺりとした素顔を見せながら現在までその生命を保ってきました。漢文教材で「渾沌」を取りあげた際には、その死に多くの生徒が衝撃を受けていま

した。情報過多により本質を失うテーマは思考教材として最適ですが、そこまで深く捉えずとも学習者が各自の「渾沌」像を表現する授業も楽しいものです。今後とも「渾沌」の変容が続けば、また違った一面を見せてくれるかもしれません。